

パンタナール通信

南北米福地開発協会 会報 2004年12月1日発行 第15号

南北米福地開発財団開拓地、レダ



レダ基地全景 (2004年10月) 研修所、ゲストハウス、警察署、労働者宿舎、植樹園等)

南北米福地開発協会事務局
〒150-1000 東京都渋谷区神宮前六一九一四
FAX 電話 (03)5774-0544
神宮前ハッピービル十階
開拓初期 (神山会長と日本人スタッフ、現地労働者)



レダ開拓前 (1999年10月)



南米、パラグアイ国 (日本の1.1倍、人口550万人) 首都アスンションから800km レダ (20km×40km)

パンタナールでの各種活動

パンタナールでボランティア活動に関心のある方を求めていきます。（三ヶ月から一年）



エコツアーと環境セミナー



インディヒナの村に学校建設 (国際協力青年奉仕隊活動)



レダ基地内に研修用公共施設建設（浄化殺菌されたプール）



植樹活動を通して牧場の森林化
日本からのシルバーボランティア
と青年ボランティアの方々。

田岡大使の知り合いの方で、楽器関係の会社を経営している方がパラグアイ校の音楽の勉強で使えるの中古の楽器を提供し、関係にお願いして集める計画を立てているそうです。○○ドルかかるとの事ですが、会員の皆様へ、送料支援郵便口座 代表 南北米

ても活躍しました。その実績を認められ、現大統領に乞われて、日本で生まれながら、帰化され、パラグアイの国を代表する大使として赴任されました。パラグアイの国の大発展を心から願っている事が話をする中で感じさせられました。（柴沼記）

『パラグアイ大使館からのお願い。』

会を代表して柴沼がパラグアイ大使館に田岡功特命全権大使（パラグアイ共和国）を訪れ、会員の皆様から送っていただいたアスンショーン、スーザーマー・ケット火災被災者への義援金（一五〇〇ドル）を、渡しました。田岡大使は会員の皆様の支援に心から感謝し、会員の皆様に大使から感謝の気持ちを伝えて欲しいと語られました。田岡大使は一四歳の時、徳島県からパラグアイに両親と共に移住し、その後、移住地にて想像を絶する辛酸を体験した後、大きな成功を治めました。移住した日本人のみならず、パラグアイの人々からも信頼され、ラパス市長とし



田岡大使（右）に義援金を渡す。

している方がパラグアイの学校に中古のグランドピアノと学校の音楽の勉強で使える新品のピアニカを五〇、そして太鼓等の中古の楽器を提供してくれたそうです。これからも学校関係にお願いして集める計画をし、一月末にパラグアイに送る計画を立てているそうです。しかし、コンテナ送料が一五〇〇ドルかかるとの事で当協会に協力のお願いがありました。

会員の皆様へ。送料支援の要請

口座番号 一〇一八〇一七七六八〇四七一

レダ基地開拓期を振り返つて

一九九九年一〇月、南米パラグアイのオリンポを州都とするアルトパラグアイ州に属するペルトレダの地を南北米福地開発協会が借り受けました。その地はオリンポから約80kmほど上流に世界最大の湿地帯、生態系の宝庫であるパンタナーラの南端に位置しています。そこで環境を破壊する事のない開発をなす事を目的に当協会神山会長はじめ、日本人のボランティアを中心今日まで活動を続けてまいりました。以前、牧場として牛を放牧していたレダには八万ヘクタール(20km x 40km)の土地があります。しかし、パラグアイ川の洪水で浸水し牧場として継続する事を断念、放置された為、荒れはてた場所となり、人間として通常の生活が出来る基本的なインフラが何も整つておりませんでした。電気はなく、水は川から、勿論、電話も無い状態でした。又、道路網も整備されておらず陸路で入れない為、交通機関は船だけが頼りました。開拓当初は、川添いに生活基盤の確立をすべく、荒れ果てた家屋の改築、そして船が止まれる船着き場の建設が40度を越す炎天下、開始されました。汗は止めどもなく流れ、体が異常に熱を帯び、度々、パラグアイ川の中に入り、体を冷やしながら労働をしました。機械もなく、全てが人力でした。コンクリートを作る時には、砂、砂利、セメント粉、そして水をスコップで交ぜておりました。欄干を作り、家屋の補修をなし、生活できる基盤を作りました。パラグアイ川で洗面し、食器を洗い、川からの水を煮沸殺菌し飲料水を作り、料理をする生活でした。トイレも穴を掘つて枝を渡しただけで何時毒ヘビに襲われるか心配しなければならない状態でした。

しかし、生活は厳しくとも、昼には悠々とした川の流れを見夜には手に届くような満天の星を、そこに無数の螢が飛来するのを見ながらの生活は、騒々しい文明生活から離れ、心が癒されるひと時もありました。パンタナールは湿地帯であるが故に、今迄、人間が踏み込むことが難しく、貴重な生態系が保存された聖域です。近くにはジャッカレ(ワニ)が輝く太陽の下、甲羅干しをし、パンタナールを象徴する鳥、トウユコが

一mを超える羽を羽ばたかせながら飛び、地平線に美しく昇る朝日、夕日を見れば創造の妙を体で感ずる事が出来ます。その為、自然環境を保護しながら、人間と自然が共存していく基地を如何に築くかが大きな課題でした。

自然を破壊してきた過去の開発を繰り返すことなく、自然を守り、どのように開発を進めが出来るかが我々の挑戦でした。

また、レダが位置するパラグアイ、パンタナールの住民は最低限度の生活必需品にも事欠く人々が多く、大変貧しい地域です。六九・九%ほどの家庭は家とか家具とかが不足した環境に住んでいます。ハ一・二%の家庭はきちんとしたトイレがない状況下にあります。四三・三%の人々が小学校にも行けないと一九九六年の調査で報告されている程です。

その為、開拓初期から、近隣の村、町との交流を通して生活の向上を助ける事にも力を注ぎ、心を碎いてきました。そのため、二〇〇〇年度から日本の学生ボランティア隊を村の学校建設の為に派遣して参りました。

開拓を始めるにあたり、近隣、特に州都オリンポからパラグアイ人、そして上流隣村のエスペランサと下流の隣村ボケロンのインディヒナの人達を雇用しました。私達、日本人を含め一〇〇名程で建設が始まり、言葉の問題、文化、生活習慣の違いもあり、最初の頃はお互いを理解する事が難しい時もありました。しかし、日本人が現地の労働者以上に朝早くから働き、汗を流している姿に現地の労働者も心を開き、協力を惜しまなくなつてきました。

開拓一年後には自家発電が出来るジェネレータ室が完備され、船着き場から宿舎まで整備された道路の両側に電柱が立ち、夜は明るい灯をともしております。今では労働者の宿舎、日本人が生活する宿舎、ゲストが来て泊まれるゲストハウスとバンガロー、そして各種の動物(ブタ、ニワトリ、犬、羊、ハト、猪等)の小屋も建ちました。牛や馬は以前からあつた匂いの中で飼われ、放牧されています。野菜作り、植樹も行なつて来ました。

気候が暖かいので、植物の成長は早く、野菜は多くの種類が十分に育つており、将来、希望が持てるように思います。私達と現地の労働者の食卓を十分に豊かにしてくれました。

その他のプロジェクトとして、水問題がありました。今迄、パラグアイ川近郊の人々は直接、川の水を飲んできました。その為、衛生上、多くの問題があり、特に幼児の健康に多くの障害が出ています。

パラグアイの川の水は細かい粒子の粘土によつて濁り、また大変、衛生上問題があるので、どうにかきれいで、衛生的な水にしよう」と神山先生はじめ、皆で、研究し、衛生的で、透き通る水を作る事が出来ました。今後、その設備をより一層、改善し、近隣の村、町に設置していく計画も立てています。

それとともに、教育修練所の建設をなし、日本、アメリカ等の先進国の青年がパンタナールの自然に触れ、また現地の村で奉仕活動を成し、共に汗を流し、連帯感を築く、現代先進国で失われつつある心の絆を築く機会を提供してきました。

乗馬、釣り、サッカー等も大自然の中で存分、楽しむことも出来、先進国のコンクリート文化では味わえない、心の豊かさを築く機会を提供できるようになりました。また、現地の青年達を集めて、農業、林業、機械技術、建築技術等の指導や、文化交流の場として用いる設備にもなっています。

ボランティア要員募集。

関心のある方は事務局に御連絡下さい。

発足以来、五年間の間、多くの方が南米、パラグアイレダの地でのボランティア活動に参加していく、だいたい方、また、現地のスタッフの健康管理のため、食事の話の為に参加してくれた方も居りました。是非、ボランティア活動をパラグアイ、パンタナールの地でしてみたいと考えている方、どちらでも気軽に連絡をしてください。

担当柴沼です。

会員の皆様へ 支援金のお願い。

パラグアイの学校に楽器（既に協力してくださる団体があります）を送るためにその送料を皆様の支援金で！！パラグアイの田岡大使とも話し合いをし、その楽器の一部は国際協力青年ボランティアで昨年建設したデイアナの小学校や今年のプロジェクト、工スペラサンの中学校にも寄贈してくださる事になりました。

十二月末までに
お願いします。

目標は一千五百ドル
(約30万)です。

代表
南北米福地開発協会

柴沼邦彦

口座番号
一〇一八〇
七七六八〇四七一

パラグアイへの
発送は一月末に
なります。

